

藤田浩子の 少し昔のこと 〈101〉

米の力

昔は、お米1粒に7人の神様が住んでいらっしゃる、だから1粒でもこぼせば7人の神様を泣かせることになる、と言われて、ごはんをこぼすと叱られました。お茶碗に1粒残っていても叱られました。お釜にご飯粒が残っているまま、洗うなんてもってのほか。お釜に水を入れて、へりについているご飯粒を落として、それをざるに入れて干しておいてたまったら煎り米にしたり、野菜(主にお芋)と一緒にしておかゆにしたり、とにかく無駄にはしませんでした。お米には特別な力があるとされてきたようで、昔話にも、竹筒に入れた米を振って、その音を聞かせたら、瀕死の病人が生き返った(竹筒の米)とか、3升飯を食べた貧乏の神が福の神と相撲をとって勝った(相撲に勝った貧



乏神)とか、長者の家のネズミと貧しい家のネズミが相撲をとって、いつも負けるので、貧乏人の爺様と婆様が米の粉で団子を作って食べさせたら勝った(ネズミの相撲)とか、いろいろな形で米の力を表しています。

戦争が終わっても食料事情はすぐにはよくなり、お米だけのごはんはめったに食べられませんでした。お米のごはんといっても、かて飯と呼ばれるもので、半分は麦だったり、細かく刻んだ大根や大根の葉、さつまいもの蔓やずいき(里芋の茎)も入っていました。たんぽぽやよもぎなど食べられる野草が入っていることもあり。1日1回は代用食といわれて、じゃが芋やさつまいもやかぼちゃだけの時もありましたし、甘くないホットケーキみたいなパンもどきのときもありました。材料はメリケン粉(アメリカからきた粉ということで小麦粉のことをこう言っていました)やとうもろこしの粉です。私はかぼちゃやさつまいもの食事、パンもどきの食事好きでしたが、やっぱりお米が一番でした。

リレー連載 <234>

わたしの大好きな絵本

WKM (ベリーズ)

食欲の秋！おいしい食べ物がたくさんある秋！お芋掘りがさらに楽しくなりそうな一冊です。

くまさんの畑でどっさりとれたお芋「こんなにいっぱいだもの ひとりで食べてはもったいない おとなりのぶたさんにもわけてあげましょう ぶたさんもおいもがだいすきだから」と、荷車に半分のお芋を積んでお裾分けに行きました。

くまさんからたくさんのお芋を頂いたぶたさんは、その半分のお芋をたぬきさんへお裾分けしました。その後も、たぬきさんはうさぎさんへ、うさぎさんからねこさんへ、ねこさんからねずみさんへとお芋が分けられていくあたかなりレーがつながりました。

『おいもをどうぞ！』

作：柴野 民三

絵：いもとようこ

出版社 ひかりのくに

最後のねずみさんには一つのお芋、一つもといっても、ねずみさんにとってはとても大きなお芋です。半分に切り分けたお芋がくまさんの元に戻りました。

相手を思う心優しい動物さんたち、「いただきものです。どうぞめしあがってください」「まあまあ これはありがとうございます」の動物たちのやりとり、お話や挿絵もとてもあったかい絵本です。

